詞通略

ホ

ホ 2
5594
2

東京帝国大学
3
東洋文化研究所

詞通路中卷

詞の系図の事

[illegible]

本居春庭

内2
號 5594
2

和
三
異
函 工

詞通路中巻

詞の兼用の事

本居春庭著

詞の名なども詞なりもまたとかたしもそれもそのつかひ
きようりてうの用ひかたあり又うの用ひかたあり
ふるもまた又ふる用ひかたもあり中にまた一格なりて又活用
ようてをうなてゐてあるもの活用めくりて歌のをうこうはら
をもをしいくゆる格詞も多くをうれるもの又序ゆゑひ
はれ名なるなどのうちをまくよひなしいろのさ
ゆゑひをしいろをたるをきたる事をて文ゆゑ序
文古文ゆゑれとそれをうくはまくまとちひる事なく

のちしれ文はをさりしなきことなりさてよゝにくゝ用ひさるは
されもしらすわたるともすくなれとうひ学のともこゝろへ
ろえおくへき事にてそのみさむかうわらへるにまをとさいろえむる
すけるもなかくて又いときなきことはしきまなきあしもあて
用ひあやまることかれはれを今よのこゝろひとをされうきいさらは
うつ次に峯をとへてきくへきなり

梓弓そる山まことゝえられは道もさかあくれをも有しそちりける
うらと法を春ふわらとえらひてるなり
玉匣あけは春のあきちめくゝ秋ふかくうしをひとゝえ事むかうそ
匣をひらくと秋の明ふうわ用ひたる
はれもなき人をや霧くゝ信濃のおくは歌さめくゝ志のをみを
霧のおくと起るさいふこうわ用ひたる
かねてより思ひしこゝろそふし葉のさいふこゝうなる歌せ母こゝく
葉をさすと柏よこゝて車まうわ用ひたる是ホをいふゆるかく
らねなり然いとをし
雨ふれはさよるの山のもみち葉くゆきふふ人の袖さくそてる

雨ふれハ笠をきるものなれハ笠とり山によせたるなり

夕つくよをくら山になく鹿のこゑのうちにや秋ハくるらむ

夕月夜をくらきを小倉山によせたるなり

君をゝきてあたしこゝろをわかもたハすゑの松やまなみもこえなむ

清簾をあらせといふてつけつけの月ひかりことをとらせたるも

アそていふ代他多しといへとも枕詞なり

なからのふるきなくはなの河浪のおもひたてかなふころ

外のふたと夜のことのかひ浪のおもひと起こらるゝをと

ちひろかられハ二つとも枕詞なり

あつさゆみはるたちしよりとしつきのいるかことくもおもほゆるかな

梓弓ハよるにひくものなれハ枕詞なるを梓弓を用ひて縁

の詞として射るといへるなり

夕つく夜おほつかなきを玉櫛笥ふたみのうらハあけてこそみめ

これもはしめてくしけのふたといふことを二見の浦

にかけたるよりひらき縁詞のあくるを見のいへるなり

といへり

からころもひもゆふくれになるときハかへすかへすそひとハこひしき

これも衣ひもをゆふといふを日も夕暮といふによりて衣の

縁の詞にてかへすかへすといへるなり

きる衣のおもふにあまされ妻すれハむかしのわろしあはとしるなみ

[illegible]を奥にうつす月ひて松風をうつすよ秋の夕むの事

をいひて後のうせをうつすなり

梅のうれちてふなくて夢あれふりてつなくうぐひすをうつ

これも夢うちの浦おうをと声を振つふうりてそのけうれふ

うつうつりてむのちをいとをやうせたうたれをおうし

うつうつり

久しくもなりにけうれをうれえのさけ〻ハ装しきおうをみうう

さきも住江のい松風のさうてわをうつうつのうせて

久しくなりにけいうつうつり

夕暮ハうつもかうう後のおうあしやきえたうけ所さ

うれをうつ〻はゆのおうをと起うふうりて松風のさうなううう

隙ハ風てかうきえをあいひうせうり

かううつもうつ日をきうう所のあきてしゆけハ月めうきあれを

見も夜をけ〻をおうをけをうりて初ようる松風うる

さて後のゆうと起ううりてハ見も松風のさうりてうのえ

んの風てきえなとうるうり

をとうあううあ〻撰のうをとハ梅をてうけうう後浦ううえゆ

ようりいひつけううれハ撰の糸を梅をてかきあけうくを

たう後とい木のうをううりううりひうう さくうをうのくを

ううふう後うりいうゆう序うり

あつさゆゑひけくたまるかふるさとにたれこひのこころは
ふるさとをあきのとひくるしてあをのこころのうつもち
ひくるして序ふるり
ゆくるのうきねるくるまつらん人をれるもたたてもなし
られも上ゐを序をてつられ縁の泊まて揺をあるこころふ
うち月ひくる
ちるやよゐなれさ示うをゆけをそそよ人をうれ色くする
こいさく示のををてそくをつるまて上のゐをそそをい
もむくあれくをすをそそをと伝伝ようやくちやとりつをこの
ををそひくるり下の白れをを伝ようやくくさやくであるる

八をおそれなれいくるとねと裏をいひて人をうれ
くるをあるけりくるり伝の野なをらく見つし
かくるをきくはしうきるもうなくれくらくしうむうをし
古き位とくる皆あやるりくれをつのそるくるり
雪のくそれやくるのふるをくやるれよ八人のは色なくるを
古常と人の書くをそくをふうり月ひくるくれ八皆をそ
いくゆく序ふそを六歌のををあつくれ
をうをくくるれくるあふるあるよゐをけくる利をを色をるゆく
ゐをくくるを雪をうり月ひくる
をくあるるゆるるのくるをのくしきををうり外ひをあてをさ

これも神をふることを布留山といふことわり後世神ふるやといふ
名のことはの給なり
ひとりゐて物をなげくハ秋の田のいなのうへ〻いぶせきと
ものも給葉のそよぐを俗侍るさゝぢやむぢやといふことを
うゝちひとりうれゝるとふ一句あきれられと序ものと
いとゝ
きこみ川のほれハ下る給ふのいなはあれどこのつきはうれ
こハ上れ白を序て給ふのいなのいなとまを給物をなのこと
ゝちひとりなり
あゝ川の炭人のひとゝきふまれとふ子うちやうなしハ

先も何をまを給てほとを多きといふきれをうゝ用ひうゝ
かゝれのゝうゝ出るれゝゝれ給ぬなたゝしゝられいとひそ
こハ上のいなふのといふ所のさもて何をまを給れゝゝをを
不寝名をといふをうゝ月ひさてゝなゝを操よをゝものを
なれハ事ふをををられていとう
かゝゝれみをゝゝきのいゝをの名ゝ田名きをいゝゝ
こハ上ゝいひつけゝるを岩の岩ををなるといひさものは
ゝきゝうて悔ゝをゝうゝしゝ月ひゝゝちゝ代をと下ま
をゝゝくいふを考く合をくゝし見ものを序ものを
うれる田ま生るひとちの徳ま出れを世を今ゝゝふあゝ栄ゝとの

飽くまでふ秋のくれをとうれく
春の世のそれもまぬかれと君うめとれ数をつもむとそ
積よ摘のこころをうれくうち
大空にくもるはるかに月舟とれふるをそてをぬきけり
浦よ海をうれていくち
弱くてもつしとみるそれをハよしみのはよふりやちめくせ
霜くなくふ浪こころをうれくうち
春のうや世をふふまれをひきうのくあもかこよはもむとなを
互といみよ春のことをうれくうち
くめあくはくんもやしとハいくれうちくもつれなくるてそひち

夜しとしみよ年のことをうれくうち
ようふのこひやくくむ白のゆきくくよあめこうれた
をと行をうのくうとうれはくきハをとむれくしをち
くていまくことをむれくしていくち
はくくれのあやこふくちそくる春のくやきのうけをこひはく
春のくみよ春をうれくうち
別路を鳥しき人のふをちきやをしてのくくそくかれれ
遠よ破をうれていくち
あきいくしだくもあれく年はは柄のくちしあをこひしうける
如のごふ碁をうのくうち

あひみぬもうき身のすみはうつる心ひきもとめてもうつろひもなき
うつせみのからにかはれるといふ何のうつりといふことを兼ぬる
いもせ山谷の下ゆくうちこのひむろのこほりはなかりきて沼ぬるる
浮けるは小流るるをいふなる水見ゆるにある沼のこころもいふなる
宇治山の紅葉をみては古本のゆゑにひきもむしろはとぞいふなりし
日をへて氷魚のことをいひていふ網代のさまなり
みなそめしきころもそのかれを人をあはれにさうけるてふなり
鋭に灰汁をいふなるなり
さらにふつれなく都にあらしておもひのまゝにいふかひなき
うつひの嵐に子をなすことをいふなり

限りなき心ある人はむかしもなれて人の心もとはなくてやあるらむ世
下に君のことをいふなり
かつむかしのゆゑにをちこちうつひのこゝろはなくても世
憂くかすに学をいふなり
まちわびし事をうしや諸々のむ茅葉のかゝる露のいのちを
なき人の形見にあやしきはなこそも袖のぬるゝなり
見てといふは涙をいふ事をいふなり
あはれなるくきゝみかね君はみそひもちめるくさ枕なり
君としたるは公利といふ人の名をいふなり

ちうくてそももさそれる主御の糸をうちてそみくこう利けく
是ハ之書よ糸とよるこことどう行ちりされと糸とうる仕孫
の何のこうて糸のこてよあつうけ
ちうちれて又もこえけうもくこうあむうしの今ゐなるやあくむ
こハ紙兼山を紙とうしてそよふれてといつ振をそこう
孫今うなるふくいつよ何のことを兼うちうれも孫の何のこうて
作くうこて糸のこてうちうけ
糸こうよくくゐの色ちれ孫くちくもうれをゆくしく
くくゐ山をくくゐ千年よう行ちちひこを山のちくくうこてこ
ちうこてうちう

寿の田を人うちうこてうれハそくむこうこうをつくこうこうな
ゐこをなふ作ことをうこうう是ハ田れ月の主張てひ
ちせくうちう
ちくリの山ふくくきれけてやあやゆの主れねうくてくなく
根くきとうなくうさて五月五なれく菖蒲をこあくうう
きうよれくきくれ白主くうこておきてひふおゆいよあくけあくし
こハきうよ主くうこひうけて菓とう行起ゆくふ主後の主を孫
又主後の孫てけあくしくとくうう
主をれくこひこくの孫のきくゆくくをのきゆくくきあう
こひ年くくとひうけて神孫のこくふいひうせうさてをの孫

の沼にてみちのきこえぬことをいとうちち

高とのこゑのよさてこのめ山なれいふしのねのこゑ注ぬ日くなし

高とつ行よさてこを法にあらひけ又その沼のふしの行ふ

いつをきめてこふ月ひくもあちこしものを

てこてあれこをもむこいをとこ山をゆきはもあちこしものを

仕更といつまをとこ山をゆ行又筆行ふ坂をゆくといつまをてこ

行くこちち

高こ高もこ高れもてこ一雅波ちるこ高なひひきこ高ふくこ一

こはこひてこちとりつまとこ一胸引といひて逢きやこいつか

まこ月ひくこるなち雅波のここてひちせこなち

秋の田ゆ行てふしこも掛なくふ行こうしこう人のこうこ雅波

物を仕行といつまこ月ひこて物の孫こてひこのこひまこうこ

といつまこ苅をこう行くこうこうこも物のえん行こちち秋の田のこ

ちこて仕ここる高ちち

沼のこちこうけつこよけつこな地こちこ才こうふこなこあせこしまふ

陸こふ路のこちこを行物やふ附のなこあよ高の事をこう

行月ひくこち

高このゆく城の白山こ行こも中きのこちくあこ仕こち行む

行よをけここを行くち白山こつ行よをけこをこあく

なちいつこもこをの隊行こち　又二三けの白ここくこを手行てあや

[illegible]

うつ汐の流きひ[illegible]をきてうみ[illegible]あけ浦よ[illegible]とそてきて

汐の干ふ[illegible]のこ[illegible]を称汐れよ[illegible]とを称こ[illegible]あのう

ふ称をうるて[illegible]のみてとそ[illegible]

[illegible]ひ毛[illegible]かこ[illegible]ふきうあせく行よ[illegible]のふのくさと摘ましし

かくみの[illegible]よ形[illegible]のふを称[illegible]ふ[illegible]ふことを[illegible]

[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]は[illegible]けこ[illegible]いさきこ人を[illegible]

[illegible]のこ[illegible]とひて辰の[illegible]けこ[illegible]称人を[illegible]ふ雲を称

[illegible]を[illegible]ふ[illegible]けき[illegible]称[illegible]

あけ[illegible]ふ[illegible]て[illegible]の[illegible]

田の実ふ称を称山田の[illegible]の称[illegible]の[illegible]を

う称て[illegible]

[illegible]ひ[illegible]やこむ[illegible]

かく[illegible]

とつ[illegible]ふ月ひ人やこむ[illegible]

あよ[illegible]のかく[illegible]

行[illegible]称[illegible]

ふ[illegible]の[illegible]

おく[illegible]人目つ[illegible]

人目[illegible]称[illegible]

河をわたるとよむも川の瀬なり
天河なかれて さひハうつくしくてあるあはれと見えずせはやくくらむ
流来てをせくなしきをとる程月ひあはれとおもふその時や
いつみ洲の事をとる程のくも川の瀬なるへし
えらるれいちくれ山の岸よおつるまゝにしきりつく今こそ大いむ
いなくふよいひかけて流る事をとる程枕を待ことをとる程なり
みをひ出るをきりくれ山の岸つし いく程くるてあれ立しき物を
ときとし山とらひちて時とり事ふらぬ月ひ又岸つくし
いつこともとこをき程ていふなり
春よ峯をわたるひ行きましく限りなくいと多し色ふなるそく

てあるへし世中にもたゞに活きて事を兼用ひたるにいふへくつ
まきらはしきもあれハうひ学のともからのためにくはしくいふ
へしそれも 来れ 明れハともに佐行四段のはたらき詞なれて
なさむ なさし。なれ なし せとして 来れるも 明れ事も
なり又 飼ふ 買ふハともに波行四段の活き葉なれて うはむ ひ。
ふ。へ。とはたらきて 飼ふるも買ふるもなり又 降る 振る をともに羅
行四段の活詞なれて ふらむ ふり ふる ふれとはたらきて降るも
振るもなりとありなれハともに同し活詞なれていつれもよき
なる事なきを 悔ゆる 崩ゆるハ同し也行の活詞なれと 悔ハ
くい くゆ くゆる くゆれと活きて中二段のはたらき葉 崩ハ

くえ。くゆ。くゆる。くゆれと法きて下二段のくゆらき云集るれハ
くゆ。くゆる。くゆれといひてハ悔のそこゝもゝ嶽のそこゝもそこゝれや
くゆといひてハ悔あらひて嶽をくえといひてハ嶽ふ
のミいひて悔はいくゆ行なり又隆ると隆るを羅行四段の活
用と波行下二段の活用とゝて隆をふむ。ふる。ふれや
法き隆をへふ。ふる。ふれと法けくふる。ふれといふきハ隆
も隆をうゝひてうゝ行ゆくゆれとふむ。ふゝひてを隆め
事ゝなりて隆のこゝゝ行ゆひまへふといひてを隆のたゝれ
ふるりて隆のたゝれなり又燻ゆるを悔ゆるハ羅行四
段の活用と也行中二段の活用とゝて燻をくゆむ。くゆる。

くゆれと法き悔ハくゆ。くゆる。くゆれとゝて燻も悔ゝゝなれと くゆむ。くゆといふ行ハ
燻のゝゝ行ゆゝなり。くゆ。くゆといひてを悔のゝゝれゝなりて
なゝひよゝとうゝゝて又垂と起くゝハ加行四段の活用と日中二
段の活用ゝゝて垂ハおゝむ。おき。おく。おけと法き起ハおき。
おく。おくる。おくれと法けゝおきおくとくハ垂ゝて起ゝゝて
よくとおゝむ。おけといひてハ垂事ゝれゝなりて起ゝゝるよなゝ
ゝおくる。おくれといひてけ起ゝゝるれゝなりて垂ゝゝゝゝゝ
なゝゝて又事をゝゝゝ。おゝゝゝゝゝゝを兼ゝゝ。くゝを羅行四段
の活用ゝて くむ。くる。くれと法び くゝハ日中二段の活用

さて らぱ らる らぱ られと活けて らぱ らるといふ時は末と
なるも ねよりてなるもかよりて用ゐきとなる゜む これといひてハ末
となる事にぬといひ なる゜ なれといひてハねよりなる事にぬといひ
てとも上通ふし用ひられぬ事なり

後撰
夕暮ハまつもかゝる白露のおくるあしたやきえハ果る覧

動ハ加行四段の活用にて おかむ おき おく おけと活きて おくる
ハ活かぬ詞なれともこゝハ白露の縁といひかけてそれはるかし
とりて動かす用ひたるなりいひかけハかく信のなきなりまて
くらたらもいと多し

續後拾遺
つれなしとうハんをさく山本のら゜る゜ら゜もをれ嘉つるこ ト部

未となる時は羅行四段の活用にて らむ らり らる られと活けハ
ら゜ら゜となるといふにて らればいひぬ詞なれと添ふ末はらる和
なれとも縁そ ら゜ら゜らひてそれはなとしとみてとの ふ
ららことに用ひらるてよのおくりと合ぬ少し難あり ららる
ま羅行中二段のくらうき詞なり

拾遺旋頭歌
棒ふおりくしてい゜み゜しとも難く行くに出てそ婦きて
重うりける 是を奥へ世の入る事を喜てらの縁語にていと
いとるまて不まてなそてらけるなりされとこれはいかんとうつれ
いりを引れ縁語にとをおりくてはおまる゜ゆゑ 射ハ也行一段の活用
まていぶ いれ゜いれと活きていりといはしなされてさなり然る

と今俗語小羅行羅の法師ぬ いぬ いぬ いぬ いぬとい
ひしも法師ぬと知ぬれとうく法きたる事おほえて
なるれる法とそきなりうれるの事いさこうやきこと
ひるなれくくうく考ふくきことなり此こひなるあるく
うれくふなるくてそくく
さて法ぬとう行ぬ事ふるあけるかくなることを今はひとの
ふ小ふ日面なるふ日をぬふて 日数ぬふるなくある事多く
いくくきあやまりなるこいとよるかく除経をうねもちひむる
を日数ぬふ。日をぬぬとくく除さるも法をふもなりてう行
いくくくを日をぬうていあれ除こるれこなりて日を法こ

また法なるふ除をぬふといふも法なき事なり思ふよそ
拾遺 哥中ふ行ふあふとそてうねふうるかくちうるを
新千載 哥代うをつきくくしもおくるの法中れふくくくむ
うれくとを除るこるれうれ法なるくくこのふくとくる
さくしの為くなりなる事をくるて。ふぬ。ふぬ。ふぬ。ふぬ
と四法行中二段ふ法きて ことも ぬも天事なるるや狂尼ホのこき法
うれうきあるくあ行るくれと今どくくれはかひいてされるる
結てとの序ふいるくし
よる拳くくた大うと三代集の言ともなり後日そ為りく ぬも
ともいくく巧よなりもてきぬれて狂をひさるも又いくく天うるそ

うなかりしにあらざりしてまたきなり

詞の延約の事

古く古事記書紀萬葉集に詞のはたらくを見るに延約のさだかなる
ありまた又つまびらかなる古語どもをよく見るにこのはたらきを見るに
まれなるを萬葉集よりのちの歌にいやしくいはれずなりゆきてそれ
より後はいよいよまれになりしにこそなれもし延約する詞
は佐行と波行と羅行とにのみある事なりさる中に佐行と波行とは
に延約するはいと多かれど羅行にいたりてはいとすくなししかのみ
行にては延約する例なしさて羅行の活詞の延約するは多くてさ
みの活詞のはたらくはまたまれにしてさて延約するさまは自他の詞

のはたらきに同じくその活詞の第一段よりは佐行波行に延約
する例なり加行の活詞なれどかくのごとき延約する多行の活詞なれは
たゞ約延む麻行の活詞なれどもまれに延約する例なり又良行の
第四の段よりのはたらくもあれど是をいはずそれ共は又自他のこと
なれは第三段より活く詞もあれどのはたらく詞はさて第一の段よ
りこと第四の段よりはたらきて第三の段より延約する事はいとしく
まれにて只一つ二つあるのみなり

是にある詞の例

○加行四段の活詞より佐行四段の活詞にはたらくを見る
あぶくつはくも八　あつむつぐなり

あをうら絲なつ　ハ　大御言なぎち
これとひらこうぜ　ハ　氏戸ひらげち
なごなうさまく　ハ　汝ごなうちくち
なけうぞつまふ　ハ　なけぐつまよなち
ふとまうぞ天下　ハ　ふとしぐ天下ち
うしときこぞ　ハ　うしときぐバなち

○多行四段の活用より佐行四段の活用よめくうこそ

あくふこぞ　ハ　あくふちち
あをまうぞらむ　ハ　吾をまつらむち
ゆこうもふぞ　ハ　ゆこうもとちち

○波行四段の活用より佐行四段の活用よめくうこそ

あぶこぞ　ハ　あぶしをあち
うまうぞきこう　ハ　うまうぶきこうち
なこうぞ　ハ　なこうぐち
きこぞ　ハ　こぐまふくち
みことこぞ　ハ　御言とぐち
えつこぞ　ハ　えつこぐち
うれとこぞ　ハ　うれとぐち

○麻行四段の活用より佐行四段の活用よめくうこそ

あさふぞらむ　ハ　あさふらむち

あ　ふまぬなハ
なつまぬこハ
ちまぬかつよハ
○羅行四段の活用より佐行四段の活用よりそとつまて
あまつぬたつちハ
いゆきちつぬハ
ちみくちぬハ
ちぐふ絲ちぬハ
ちくうまたちまつぬハ
さやこふてぬハ

あ　ふむなつ
葉つむなつ
ちぬかつふつ
天つぬたつち
いゆきちつぬ
ふへちぬつ
ちくふ絲ちぬ
ち酒をぬつ
さやこふてぬつ

をつをふぬこハ
○麻行一段活用は佐行よりつつあり時行の言より拘らん
ちつよ佐行四段は活用よりつ
えぬ　ちまひハ
えぬ　ちまひつ
ちつ年をちつふりふちつ
ちつうれぐのこ後ちつ
一段の活用のけくつちつ
ら行又一段の活ちつ一言は活なれて外の延つつ活のさて
ちちいさこうえちつ
○也行中二段の活用の佐行四段の活用よりそつちつて

小田をうぬつよつ

いひふるそこやせこそ　いひよ飢てこぶこそ
やこそ　やこいてこそ
中二段の活用の延たるこそ見えてあよこあこそ
○奈行下二段の活用の佐行四段の活用よのそこそこそ
いこなこもをハ　いこぶもをこ
いかしなせハ　いをねこそ
なここむこあこハ　あこむこ故こ
やこいなこあハ　やこいねあこ
下二段の活用の佐行に延こたここれのこそをの行も段な
しに対これを一言の活用そなふこれこれの例こたこ

さこふよゆれと終止一の言これこ同こここきここて
言ここことなし
○佐行変格の活用より同行の四段の活用よのここここハ
弁さひせこハ　弁さひせこなり
しひやこせこハ　旋ここここ
佐こせこらしもハ　汚こらしもこ
ここ第四の言せここめここここて第四の言こ延こ
こふ色のここてかの行こ段なこれと変格の活用の第四の
言ハこなここ四段の活用の第一の言と変こここ同しけれハ
ここなこここ

右にいへる佐行よりのうつりてアいへるハおのつからさることなれと常に
ゆかぬも多し又ゆゑありて四段に活くさまなるもてらつきる
ことわりなるもあれと多くハ活きたるさまなるにかく近ういへること
後の世の詞づかひなし
祝詞に　うけとふ・おふとあるハ　うけたまはりてハ多行四段の
活詞の佐行下二段の活詞にのうつりてアいへるなりまた佐行下
二段の活詞よりのうつりてアいへる例もなく又うけたまふにのうつる
皆四段の活詞なれとうけたまはらう　うけとらせふ　ともいふへ
き例なり又なかゝらせふことゝもあるを　なかゝらせふことのゆゑてアいへる
なきて　なかゝらせことゝもあるへき例なり

おしひらう約ハ　　おしひらけなり
此日くらさ約ハ　　此日くらせなり
いとひまさ約ハ　　いとひまでなり
うちたゝす約ハ　　かくしもちれなり
あめとたまふ約ハ　　あめとたまへなり
これらも近ういへる詞のまゝなれとこゝに出しつさてふるくは
うけぬく四段の活詞の第一の音がさふてまらふにかよはしの際
とりたるをおかしきことにひとり古今集よりさきなる古への約ハ
ㇺのこれ約そてつゝひさまのことゝなりあかきたることゝ約を第二の
音きおちびみてうそうかりて

みておくるまぜ・絲ハ
なほもあかるまぜ・絲ハ
うれしとうるめ・絲とハ
さてもやめうるま・絲ハ
みうるまるみ・絲ハ
沖捨ふまるみ・絲ハ
なるあるさて一段の法印を分二の書きぢびみいぬ中二段の法
ゐ紫も分二の書きぢびみいぬ下二段の法印を分四に書え
げせてれへめえれぢうれするのそりてあるさることるのさ
と兼るる絲ちるまる
いりきてちる・絲ハ
入まて絲ちる

うるえまる・絲ハ
うやをうる・絲ハ
はまをふる・絲ハ
まるえるる・絲ハ
うるえまる・絲ハ
物うるえまる
うやをうれ
えをふげ
まるえるる
これらはこの行の分一の書きの法行より廻りて又三法行の分一に書
きりぬるるるて二ゑ不廻りたる印ふげのふ・ぜ・ぢ
のるるるしふ・ぜのまるふる・絲と廻りるるるる・ぜ
るる廻るるる・ぜの又るる・絲とのるるるたるるる比が上れよ
なるるるるてまるる

○加行四段の法印の波行四段の法印よのるるるる

いひけうびけちハ　いひつぎけちち
けうぷうつよハ　つぷいはるすち
いろけうぷハ　いろつぷなち
きくふうびハ　きくふぎち
なびうびしハ　なびきしち
まつ詞を字鏡ふけうぷとあるをぷちち

○佐行四段の活用の波行四段の活用ふのくとしてを

うくさぷへあうきんハ　うくさぷあうきんち
うくさぷへしやハ　うくさぷしやち
うくさぷなくハ　うくさぷなくち

うくさぷハ　かくさぷち
けうくさぷを押へてきぷハ　けうくさぷを押へてきぷち
行うくさぷいきぷハ　行うくさぷいきぷち
まつことまつをさぷハ　まつことまつをさぷち
ぷるぬ人をもあぶさぷハ　ぷるぬ人をもあぶさぷち

○多行四段の活用の波行四段の活用よりのくとしてを

まつさぷハ　まつさぷち

右詞はあうつ毛のくとしてかまへあつしけ

○波行四段の活用の行活用ふのくとしてを

あつさぷなくさくハ　あつさぷなくさくハち

○麻行四段の活用の波行四段ふのくるとしくるを

○四維行四段の活用の波行四段ふのくるとしくるを

みるきゝびつゝは　みるきゝぴつくなり
もゝゝぶつまゐは　もゝゝぷ自のなり
○多行中二段の活詞の波行四段の活詞よのべくうるを
もゝゝびまけゝは　もゝゝぴまけゝなり
まくこれのごとそかよえあくうれ
○波行下二段の活詞の口活詞よのべくうるを
みすひそのゞくまじは　みすひそのぺまじなり
たゞきもかよえあくうれ文加行佐行麻行羅行の四段のくゝらき詞
の　ふゞを　ふまぐ　ひきを　ひぐ　おしを　おさぐ　とをを　とぐ
なく波行下二段の活詞よつくるそをとうさうたゞしなるさうな

けと序よさゝるぞうり是ホと第二外書の第四の書ホえうかたちなり
○羅行下二段の活詞の波行下二段の活詞よのべくうるを
なつゝらぶつゝ書は　なつゝるぷるなり
なつゝしくゝちるは　なつれちるなり
うつゝくゆくは　うつれじゆくなり
又うくろびとも　あうさかくゝりそ　けれ活　ふゞくを羅段まるくゝ
きたれは此行の羅段の活詞の波行四段の活詞よ近くゝるなり文ゐ
られのなつゝらぷえまとあるはなつるぞえまとゝなりとそ文な
うるも羅行下二段の活詞なりむくて下二段の活詞の波行羅段
の活詞よ近くまる係なゝされてたゞのなつるかくいうてと集まるそ

四段の法師の方にて波行よ迎へうとてもあるべしをゆゑを
氏行の下二段の法師よかきりてちくハ四段の法師を望よ法ゐ
うこれうれあり万葉よハなるぬ水沫の又なるぬさきこのうく
なとあるを四段の法師の仮ちれうちり
又波行下二段の法師よ なそらぬ　うそぬるといふ句ありこハ
佐行四段の法師の なぬ　日下二段の法師の うぬるといふこと葉の
のくうたるなるべしその方を伊勢物語よ あさの衣の方を
一夜ふなそぬで八千夜し行くやあくときのあんとある云ふ
のべしよ 秋の夜ハ千夜を一夜ともなぜりも句のこりてちや
なきもむとあるてうちれうる又 なそらぬる なぬらぬる

ともあるを仮の牙三ハ吉と牙みの方ちりれてうちうちり又
よそぬるを万葉よ あを方ふれてさける梅のふさかぬ
やくハよそぬてむこも あくうくかもまきらしをやし
よそぬる君ぬうくうなるふなるあるを こくぬるぬて
し方なるあるを食くおうしさちれうち
又けうぬを けうぬるを本あるハまをその仮 けうぬるを
へきをかくるハこれもちくを四段ちを法けう句ちうを
さやうう法くき句のをもあるまれを法ちあて
牙四の吉の牙二ハ吉ふううき句こうきあれをを
ちひちうし又つとちうみぬてを

のくうこそれくうこそまよびてといつくくまこませまつぺてと
あこそませまつぺてなれくまこませまつぺてといつくくまこ世房
いまこそあてはこひまこまつぺくこあこまままぺたこれ迎くこ
こそれくまかぺこあこくきをこくここを身二れまの身ロ
の高ふこれここなこ又ここぺこもあれここぺこそれ句を
くハ四段こも法きこれこ代行の四段の法句の波行四段の法句よの
くこたこをこ

○加行四段の法句の羅行四段の法句みのくこくこを

むぺこここハ　　むぺこここ

○佐行四段の法句の羅行四段の法句よのくこくこを

たこうたなぺこなハ　　たこうたこなこ

みこさまぺてハ　　水こさまぺてち

○波行四段の法句の羅行四段の法句よのくこくこを

うこなここぺハ　　うこなこぺち

あきこそぺこハ　　あきこそぺち

又こたぺこぺこあこ　　こたぺこぺのれここたこれこをくや

円しく波行四段の法句の羅行四段の法句ふ迎こくこなれこと上

こもくこるかく分これ書こまこうこうれくこ仮をこふ出せる　こぎ

のまこぺこ迎こたここれこのこなこ

○麻行四段の法句の羅行四段の法句よれこここを

命をもちくまる゜ハ　　命をもちむ゜るなり
風なくふる゜ゝハ　　風なぐふれ゜るなり
こしかゞまる゜ハ　　こしかゞみ゜るなり
ちにそまる゜ゝハ　　血にそめ゜るなり
涙くもる゜ハ　　涙くもるなり

○加行中二段の活用の羅行四段の活用にのかよふを

ふつえとまぐる゜ハ　　事枝とまぎ゜るなり

右のごとく第三此事まつれくるをもとるはよするいつれもくいとくまきてこれもよく出せるうちほくのよみれとのをてたるさた二つのもなる

○波行下二段の活用の羅行四段の活用にのかよふを

よみそふ゜るてハ　　よみそふ゜るなり

○也行中二段の活用の羅行四段の活用にかよふを

こやる゜こやる゜ハ　　こゆ゜るこい゜るなり

此外見あるハこいるこいまろひなといへるこいるなり又あら活のよみ゜るもまくは　よそふ゜つまくも　此によそふ゜なとあるは佐行下二段の活用のよみ゜にかよふ活用の延ひてるなり

○二段にかよふるもの

うりを　　たく゜ひ　　たくく゜し゜
とよふを　　まよふ゜る　　とよふ゜る゜

ふぴを　ふぺぷ　ふぷぺ

たらを羅行の活用の波行よのくらまる佐行ユ延てしるるる

ととふを波行の活用の羅行よのくらり又波行ユ延てしるるる

ふれを羅行の活用の波行ユ延てまる波行ふのくらしるるる

又いまる　うまる　うまるを二手きふのくらたるまるて　いぷう

のいまび　うまびを延て又いまる　うまるを延てしるる

されを　いまび　うまびを延てしるふんあるれ　いまびを延てしるハ

あうを又きまる　あるもきまるあれ二手よけくらしるまれ

ときまる　ときまびをいてるこふなるし

まくてよるあけるる活用も佐行と波行ふ延て羅ユ活さ

しるもおなるる羅行なるもおなるさ

まるる佐行波行ふ延るもるるいさるうこるるるるるるるる

るる紙このかと多るるし皆ふなるるるて考るる

又右羅の活用の牙三れ考　ぐをつぷむるのを牙一れ考　ぷう

だぷおらうくとけるるいることあるるハ

○加行の活詞ユてハ

ひるのきぐふるる　ひるのきぐふるる

ゆぐをるふるハ　ゆぐをるふるる

るるかけぐをるハ　るるかけぐをるる

○佐行の活詞ユてハ

はまかしまさくハ
はまかしめさくハ
めづきまをさくハ

○波行の活詞ハ
いとくもさくハ
うとくしらもハ
きけハさねぐくハ
めくみくさくハ

○麻行の活詞ハ
めさまくさくふハ

はまかしまさくなり
はまかしめさくなり
めづきまをさくなり
いとくもさくなり
うとくしらもなり
きけハさねぐくなり
めくみくさくなり

○羅行の活詞ハ
あれふくさくハ
うけくさくハ
たてまつらくハ
とくをさくハ
ひとのかくらくハ

あれふくさくなり
うけくさくなり
たてまつらくなり
とくをさくなり
ひとのかくらくなり

かくてるのこそてくさくらくはるるまでなる行ハ此仮あるを
きこくちれこさくこそあくさくらくはくさくこそしひくらくとくいふこと
あかしやくふおれゆれこと怪るくはくを毛ホを羅の活詞ハかきなり
たれこ阿奈也和の四行ハなし

又四段の活用をあらてぬむるのてふをそれを行の第一とす言

なまらすぐこのくらうあらそを

○奈行のぬのてをそのけくらうをを

あひそなくよ　あひそぬふろう

いうをけふなぬ　あゝのふぬろう

そむそれなふ　そむそれぬろう

もなるぬふ　ものなるぬふろう

うちのきうぬ　うちのきうぬろう

○麻行のむのてをそのけくらうを

いふくうんぬ　いふくうむるのろう

○うゝひち中

たくをきは　くむるのをきろう

なうちるきぬは　ちうなるるむろう

ふくぬのちは　ふくむるのは後ろう

みくくもくをは　みくらむをろう

うゝひけぬは　うゝひけむろう

ひさくけぬよ　ひさくけむろう

○羅行のるのてをそのけくらうを

みゆふゆらふ　みゆむゆらふろう

みゆらをも　みゆらをそれをきろう

さわらぬは　さわらるのは後ろう

えらぶものをくなくなり
もろとせらぶなり
おもくらぶハ
人のをれらぶハ
ありけらぶハ
をうけらぶハ
うさしらぶハ
さをめらぶハ
をれふけめらぶハ
又くもき〻をくもき〻をきと法くゆのぐのけぐとのをうらうあり

いなぐを いるけぐ をぐぶを なをみぐ らぐを ゆけぐ
あぐを あげぐ らひぐを こひけぐ をぐを
をけぐなをうり
又をれをめらけぐふあきぬ そをしとをくをたをのをけぐな
をあををきのけぐをうをり
古今集のしをうおらぐをつをるをおぶ上のぶの迎をうをな
うをうををおぶをを伝言のぶをもさを美髪小老公落惰毛
をあをハゆぶらぐををもをををもをくきをおらぐをと傳繕をたを
をもやあをむをを見ハをを老をのをつををををををれをその迎を
をををををはををををのひをけゆをゆをなり

又梓弓なれ山辺のさげうぐふ　さくらあるまで　さげぎといふ
ゝゝちもしてよよ　舞ゝる四段の法旬の仮ちふたゝうられを
けあよハ仮ゝあゝゝ
又ねるゝくゝゝくけぐ　ちゝふ　書紀ふひしゝうゝれさゝけぐ　ち
らふちゝあゝハちゝさゝゝちゝ　百事紀ゝゝれをさゝ　都流あれ
てゝくけぐもゝくけぐのゝゝもあゝゝ
又たひゝけぐ　のゝけぐ　やまゝけぐ　なゝゝくちきの
法のぐゝて長なしとけぐ　ゝゝふゝちきされぬくゝゝゝれて
序よゝふちゝちゝ　ちゝけぐハちぐゝゝゝいひてゝもよくちきの
けゝらきなり

法くちゝゝゝ旬の例

○加行の法旬ゝてくゝあの巧てぐゝゝとゝゝゝとゝゝさゝちを
へてくちきの法ちくちきの法旬のくゝゝくよあゝゝゝゝとゝふ旬
のゝゝくゝゝゝちゝ

ちのゝゝちハのゝけぐゝゝ
人ゝくぐゝぬゝゝゝちゝくゝ
あゝゝゝゝて情ぐゝなくふ
人のゝゝけゝゝゝゝゝ
なゝけゝゝゝゝて秋ちぐゝける
秋のゆゝくゝあゝゝぐけゝ

むーーちやうーうーいけむ
なきうゑ取てふくーーぢうう
るやう湖のいとなーうーむ
をゝなくーーあゐーる秋四ふ
立ーーぢうきゑくれ月をゑ
先せゑ秋のひさーーぢうくく
なーうーれくーも行くゑまのと
はくーーれとハゐらぬ秋をを
ひさーーれあくゝちるなや
さて なーれど なーれど あゐーれど あゐーれど うゐーれで

うゐーれど えーーれど うーーれど なとど のてくくく
をうくくを考くハ先四の考よう うてけれど けれどけれどとくて
あゐをる何をを れとのくらひてけれとくるこれし
又ゐきくとゐる何 さきーる さきくれなとつまりてくゑきめ
法のさゝちれとさきー さきくふはくくゑさゝちなりこゑれ
なゐあくーー
又うーらむ うーりハ うーあーむ かくあくくてはーー さゝちれくこれ
くを志きくを法くゑ何なりゝ此仏かゝゝゑあくくゐ世ひそび
又ごくくとゐる何くく志きと法らけどさいを考てのくを志きの法
とハ見なるさ何よ世ゐくれてこうくーあをーとくくとたりー此

死とかまあるとうあらえて
又とし　そしくも　けさし　けさしくをなといみるもあり　ものと
ものきとハ法とうとうさまなれと　きくしと法きていさとう仏くる
さまなれい序よいてう
又をきはぶよくそしのそひそひひしく　痛しくといくるもあり
又ものぎくなとあるとをぶくのつまりくるすり　ものぎとうて
をぶいとうあり又しのふるぶをつくるさぶくのあれく
こてよこうをあり
又くあくむとうあ　うくむと法あり　うくむが又けむとたぐまり
くるそれうまあり

いのちをしけむい
さとのきけむい
ものひめ日なけむい
きひしけむるい
くくるしけむい
ひまくやきけむい
色ホをたき何をて後学ハをさくいをきて又　ときしけあやとと
いあることあるまいをときしうくめやといとくくてあなしさまなと
ら志志きとハ法とうれと矣ちり氏仏あるよあるえて
又ものれちけるくにを　ものなくなたてよくるとるしひ

さまをかしと此ほかよろづあるべし

又うぶとゝいふがつきものてけとゝてあるうさぎのうぶのうを引くあ

のつきものゝるうなり

うをけどハ

とゝけどもハ

こやけどハ

さてこひしげくこうゝふやむくあるてこひしうぶくるあ

らてこひしうぶハのをるうふあけるるをいさこうさとな

れゝうぶむをけむとくるをるしさるるり

又うぎあげをうぶげなとうくるもあり

又きゝこの弱てけゝとくるを けあうぶくる えけなくふ けるぶ

けるむなゝと考ゝ多くいひて良なることなし

又けるぶぎき なぶきけなゝあるけをぎぶの弱ゝるるり

又ひけゝこの見ゝひけいるゝどあるけをうれのつきものるて

ひうれちり

又つゝひのけれどゝあるをきあれの弱てうれとゝつゝが牙四れ言

ようゝてけれをゝくるり牙一のをれ牙四の言ゝうけアゝ

ゝ事ゝをもいひて保多し 左事 紀伊ゝ参渡来をもみゝ

ゝけうゝをゝけうをてゝをゝのけうよあゝきてありを

つゝてきゝをゝといゝをとゝれゝるをおなしさ西ちゝゝゝ

しうこう

又このあづけるいとぎこ後もハきぞあるの弱りてけとゝいへるもの
さゝり云けりと爰こゝろハ きぞあくと爰こゝろもりけぜこゝ云
のとあるもきぞ。あこ云のけ弱りこゝもりきぞハけそ
きぞ佐行よのこゝこゝもりもの
又こゝちこけまゝとあるけきこぜの弱りてけとゝいへるもの
○佐行の注ゝてぞあの弱りてざとゝいへることゝ考よいとあるゝ
こゝ弱のことのぞふあくとゝいふ何のそゝりこゝるもの
きのひよ油を志ゞゝざこゝまゝ
ちゝこゝ字ハなゝこゝぞこゝなむ

せけうさるのきこゝこゝぞこゝむ
あこぞこゝこゝ油のうちこゝやのけむ
きのふけてこハどこぞこゝこゝを
爰ふこゝもけちゝざこゝけと
けこゝこゝ人のきこゝこゝざこゝこゝむ
さけこゝちこぞこゝむのこゝこゝむ
ときふけこゝな妹こゝこぞこゝ弱ふ
さてざれとゝ何こゝちひこゝめたれをこゝや志こゝけあこゝこゝに
又こゝきゝこゝ爰こゝ
又ぞあのてまこゝてざとゝいへる事あこゝ志こゝぞこゝけるあふ

ぶりけるなるくさきに踏るよれといひてかみとくいへる
ることなし
又さしあげをさげめしあげをめさげといへるもあり
又弱をとらせてあるハ弱をとしらせてあり又一とせふとせな
とのとせをとしへの法くなりたるなり
○多行の法にてちあの弱にてさとくなるもあり
名くぐるやうの筆なれと
母のうこみくさのもうる
ろことつみのとくぶるきこゆむ
又うちあげをうぶげとうちあげをさぶげなといへるもあり

又うちまてをうつてとあく又さきくぐをさいでことつく
ところでゐをひぶせとゐをひでえふせとえでなともあり
又であの弱にてだとくるもあり
みなひおしくむるを
られをさめくなりふみぞくむや
ふくうめくころえでくやきく
そのやとのうめさきくうと
うつせられ筆のと似たるなり
たくこもとふ好ぶる事すべき
おかせあきてふれ

後の山をこえてぬれて
ぬぬしをぬぬしをこそ
なとつくることもあり
又ぬのたとゑはくこそ
に臣臣ぬぬに云々然ぬう云々如ぬう云々ぬるこそなとあり
右事記傳ふ 告言汝者任我宮之首をいまして
ぬれこそまつとよまれぬう
又ぬの弱てちとつくるあり
うぬちをそぐぬふごと
ちぬちぬこそふまわこれぬ

よとつるちの分四れ言めでるうつるふと多
さぬふ仁ぬまに
ひとをあくまうつるぬふう
ゆめぬふのそこのこそめてき
かぬこふもしきぬぬ
このこそさふ落ぬもぬ
屋くむぬて門させうぬ
さて右のふふぬふを
あに仁ぬをのこふ
もあうぬ

○奈行そそ　こあのてまうてなこうるるあこよとあるや
もものてふをくふあのといくうることのそうこうるるる
ぬのてあうことかくこき
うくうみのきみのなくうて
ねもむうしの友のくなくふ
なくうれ稲とあくるのりくう
ふちをせふなる芸なりくも
くるやこのくれのりなくうく
まつきものを後のけけう
あくなる柏といひをれくも

くもくくなくくくつのやくくめ
あくくうれ秋の和のれくて
ゆくれてあくるなくちれと
せをくくのれやをのつ和のなる
又新嘗をくひなくといふをくれ
ひめのそびをとあくを服のあ
のあのをくくくくこくくくこ
牙小鮎菓をくく縄とあくと和名抄小加久能阿和古を俗字とあくこ
れらものあのあのくつくくくく

ゆくみゆなくしくしう尾ゆきあくを尾ゆきあくぜの行よ
ゆくくくをう

○麻行ゑてハくも。あれらくも。あれを くもれくもれといひまく
あまあ和りを あくくいひ不められを不まれとくくゆ侍蔵のを
そつく。あげくあくを信行よハつ。げくくく

○也行ゑてハ まつつくくし まつろく まつ侍 まついくくむく
なくハいく。の行てよくなれるぶゆふくくくるなり

きくて四段の活用の分二れ書き。ちちひみ。ふあくくといふ有のを
ひて分四れ書け。せて。へめ。れ行れ更ようらりるれ活きて
くくくつ孫よいとおくしさてき。あくハくう。ち。あくをさく

ちあくハくう。なくを分四の書くくくしてけくぜ。てくくく
ア段分一の書れ分四の書くくくくくくくくくくくくくくくくくく

○加行ゑてを

むれさけくらむハ　花のさくき。あくむちく
さけあくけくく　咲きあくけくく
さけくハ　さくきあくく
はくをきけハ　はきあくれぐるく

○佐行ゑてを

むとかさ。せくむハ　むをくくさ。あくくむちく
うさくせくハ　うくく。あくちく

うくぶるハ
うくぶれどハ

○多行てて
月をもてらむハ
もてらハ
もてるハ
もてれどハ

○波行てて
人のつくらむハ
つくらハ

うくぶるハ
うくぶれどハ

○麻行てて
君をもてらむハ
もてらハ
もてるハ
もてれどハ

○四維行てて
面のふれらむハ
ふれらハ

つくぶるハ
つくぶれどハ

○麻行てて
君をもてらむハ
もてらハ
もてるハ
もてれどハ

○四維行てて
面のふれらむハ
ふれらハ

つくびあるハ
つくびあれどハ

君をもてらむハ
もてらハ
もてるハ
もてれどハ

面をふれらむハ
ふれらハ

ふぱぷぷ
ふぱぷぷどい
ふぷぷぷ